

全自者協ニュース

JAAS (Japanese Association of Autism Support)

- ・全自者協ニュース／第43号／2014年（平成26年）3月
- ・発行所＝全国自閉症者施設協議会・事務局 ☎ 0975-78-0818
- ・発行人＝五十嵐康郎・編集人＝宇治原誠・URL <http://zenjisyakyo.com>



『第27回 全国自閉症者施設協議会 大阪大会』報告

自閉性障がいのある人たちの生涯にわたる包括的支援のカタチを考える
 「自閉症総合援助センター」の機能と役割を通して

萩の杜 施設長 勝部 真一郎

平成25年11月14日（木）、15日（金）の両日、大阪府高槻市の「高槻現代劇場」に於いて、第27回全国自閉症者施設協議会 大阪大会が北摂杉の子会を主管として開催され、全国から約400名の参加者があり、2日間にわたって熱心に意見交換がなされました。

全国自閉症者施設協議会は、自

閉症者の人権と生きるための発達保障、自立ならびに社会参加のために実践と研究を推進し、さらに、これに参画するものの研鑽と相互交流を促進することを目的として昭和62年（1987年）に発足しました。当法人では萩の杜及びジョブサイトよどが加盟しており、毎年全国大会を全国9のブロックの会員施設が持ち回りで企画・開催しています。今年度の第27回は近畿ブロックの担当となり、当法人が主幹施設として運営にあたりました。

今大会では「自閉性障がいのある人たちの生涯にわたる包括的支援のカタチを考える」「自閉症総合援助センター」の機能と役割を通して」を大会趣旨としました。

この「自閉症総合援助センター」構想は、全国自閉症者施設協議会が提案し、そのあり方についての

様々な議論をしてきました。

今回、改めて大会テーマとして取り上げ、その機能と役割について、現状の障害福祉サービス・制度の活用を通じた実践とそのエビデンスに基づいた議論を通して、「自閉症総合支援センター」、即ち自閉性障害のある人たちの生涯にわたる包括的な支援システムのあり方について、考えていく機会としました。

1日目は、濱田 剛史高槻市長を初めとする多くのご来賓の列席のもと開会式を行い、ひき続き2つの基調講演なされ、その問題提起を受けて、シンポジウムを行いました。

基調講演Ⅰでは厚生労働省 社会・援護局 障害保健福祉部 障害福祉課 障害児・発達障害者支援室 発達障害対策専門官 日詰正文氏より、「厚生労働省における強度行動障害児者への支援に関する今



後の方向性について」と題し、今後の具体的な方向性として①サービスマネジメント等研修カリキュラムの中への強度行動障害支援者養成研修の組み込み②行動援護の基準の改定と重度訪問介護対象拡大③地域における先駆的な取り組みを参考に人材育成を図ることの、3点をそれぞれ検討及び実施する中で、強度行動障害に関する支援の充実を図っていききたいとの講演がありました。

続いて基調講演Ⅱでは全国自閉症者施設協議会 五十嵐康郎会長より、「自閉症総合援助センターの課題と展望」と題し、自閉症総合援助センターについて萌葱の郷の

実践から、その具体的なあり方と意義、到達点と課題と展望についての講演がありました。

シンポジウムでは、社会福祉法人はるにれの里理事長 木村昭一氏より、「地域における自閉症支援の包括的支援システムと支援サービスの創造」と題し、はるにれの里の「入所施設」からの地域移行支援の実践を中心とした話がありました。

続いて、当法人の大阪発達障害総合支援センター 研修相談支援室 センター長 新澤伸子より、「自閉症・発達障がい者支援の今後のカタチを考える」と題し、教育と福祉の連携について、大阪での実践に基づいた話がありました。

以上2つのお話を受け、基調講演で講演いただいた、日詰正文氏、五十嵐康郎会長も交え、当法人常務理事松上利男のコーディネートのもと、今後の「自閉症総合援助センター構想」を含めた今後の自閉症支援のあり方について、活発な意見交換が行われました。

2日目は、以下の6つのテーマで分科会が行われ、それぞれのテーマで活発な意見交換がなされました。

分科会	テーマ
第1分科会	「地域で暮らす。これからの支援のカタチ」 ～地域の中での生活支援・課題と今後～
第2分科会	「職員・職員集団の養成と人材育成のカタチ」 ～障害者虐待防止(法)と 権利擁護の切り口を中心に～
第3分科会	「家族支援のこれからのカタチ」 ～現状の課題と今後の支援のあり方を考える～
第4分科会	「障害特性を活かした生産活動・就労支援」
第5分科会	「高齢化に伴う支援とこれからのカタチ」 ～実態調査から見えるもの～
第6分科会	「専門性を高める」 ～自閉症スペクトラムを持つ人への支援～

私は、第1分科会にコーディネート・助言者として参加しました。

分科会の概要としては、北海道、埼玉県、長野県と各都道府県における地域生活支援について、3名の支援者からの発題の後、参加者によるグループミーティングを実施しました。

グループミーティングでは、参加者それぞれが日々の実践の中の想いの共有や今回の発題からの

気付きを更に深めることができ、また、全体としても支援者同士のネットワークの広がりにつながる非常に有意義な機会になったと感じています。

当法人は第3分科会を担当し、鳥取大学大学院医学系研究科 井上雅彦教授の講演と高槻市教育委員会教育指導課 佐藤美恵副主幹、大阪自閉症協会 福田啓子副会長、NPO法人全国LD親の会 内藤孝子理事、自閉症の人のバリアフ



リーを考える親の会」はぐくみ」伊藤雅子会長によるシンポジウムを当法人常務理事松上利男のコーディネートのもと行い、活発な議論が繰り広げられました。おかげさまで、2日間の大会が盛会のうちに終了することができました。

ご後援を頂きました大阪府、高槻市をはじめ、多くの団体・関係者の皆様方に、この場をかりて、改めてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

次回、平成26年度の大会は熊本にて開催される予定です。

対談

「Competence Motivation」

山梨県こころの発達総合支援センター所長

全国自閉症者施設協議会副会長

本 田 秀 夫 氏 / 石 井 哲 夫 氏

● 本田秀夫氏プロフィール

(ネスト・ジャパンのサイトより)

東京大学医学部卒。医学博士。横浜市総合リハビリテーションセンターで約20年にわたって発達障害の人たちと家族の支援に従事。

2009年4月から2010年8月まで横浜市西部地域療育センター長を兼務。2011年4月より山梨県立こころの発達総合支援センター所長。発達障害に関する学術論文多数。2002年より、イギリスで発行されている自閉症の学術専門誌「Autism」の編集委員。横浜市および杉並区の教育委員会特別支援教育関連の業務にも従事。山梨大学非常勤講師、日本児童青年精神医学会評議員。

テーションセンターにはかなり前からいらしたのですか。

本田…平成3年に横浜に移って、平成22年に辞めましたので、19年間いました。その後、山梨県に発達障害者支援センターと児童精神科の診療所機能を合わせたセンターができ、そちらに移りました。医者が2名で心理士が7名、ケースワーカーが4名、保健師2名、あとはPSW、OTが1名ずつです。

△ 出現率上昇の背景▽

石井…もうだいぶ前ですか、自閉症の出現率について論文を出されていますが、あのデータはどのようにお取りになったのですか。

本田…そうですね。私は何回かやっています。横浜リハビリテーションセンターは横浜市の港北区を担当しています。当時はもう少し広い地域を担当していました

が、いずれにせよ、保健所の健診で把握された人たちがほぼ全員、親御さんが嫌と言わなければリハビリテーションセンターに紹介されるという仕組みになっていました。だからリハビリテーションセンターで把握しているケースがほぼ出現率だろうと、そういう状況と仮定して人数を数えたということになります。

石井…何か、あのころは主として知的障害を伴う自閉症が多かったように思われますね。

本田…そういう時代だったので、実は私たちの96年のデータは半数が高機能でした。当時、知的障害のないケースは自閉症の代いたい2割ぐらいだろうと言われていた時代だったので、実はそんなことはないというのをはじめて実証した論文だったので。

石井…それは貴重ですね。というのは恐らく、あのころ高機能と知

的障害を伴う自閉症の区別をあまりしなかった。ほとんどが知的障害を伴い、就学困難ということで親の会が団結してできたような経緯があります。あのころ横浜ではやはり療育センターはできていたのですか。

本田…最初の療育センターは、昭和60年にできました。飯田進氏が理事長を務めておられた「青い鳥」が運営していた「青い鳥愛児園」という通園施設を母体として最初の療育センターである横浜市南部地域療育センターが開設されたのです。次いで2つめの療育センターが総合リハビリテーションセンターの子どもの部門という形でできたのです。それが昭和61年です。
石井…それで、あの時発表された自閉症児の発生率は0・04%か0・03%で意外と低いと思ったのですが。

本田…パーセントで言いますと、私たちが最初に出した発生率が0・16%でした。

石井…0・16%、そうすると1万人に16人というわけですね。
本田…そうですね。最初はロターという人が60年代にイギリスでやった研究が0・04%から0・

05%でした。長く、だいたい1万人に数人と言われていたのです。

石井…そうですね。

本田…80年代になってからはもうちょっと多いのではという話になり、90年代になって、どうも私たち横浜で見ている、1万人に数人しかない計算だったら、こんなに来るはずがないというのがありました。しかも知能の遅れがない人たちがたくさん来られていたのです。それで、これは1回、疫学調査をしたほうがいいたらうということだったので、研究自体を始めたのは93年だったのですが、論文になったのが96年です。

△感覚の世界▽

石井…全国自閉症者施設協議会に加盟している施設職員はどちらかというと、知的障害を伴う人たちに対応していますから、そういう点ではある程度対応は出来ていますが、やはりまだ行動障害について、どう考えるのか、意見がはっきりしない。我々が先般、先



生も来ていただいた千葉県の大会の時に、率直にもう長い間、手しぱりと、それから便コネのような行為を相変わらずやっている利用者の方がいます。それを若い職員が事例報告したら、コメントータの先生からだいたいぶたかれました。先達のコメンテータから見ると、「何でいつまでもそういう好ましくない癖を放置しているのか」という話なのです。やはり生活空間が狭いというのか、施設の生活の中で、職員と利用者の関係が多様に変わっていく。変わっていく中で大事にしていくものは何かという、我々なんかはやはり人間

関係の情緒的交流に力点を置いて、人間に近くなっていくことが大切と思っています。この事例はいわゆる野生児みたいなところから、だんだん人というものに近づけていくことに一番価値を置いているのです。ただ、癖というものについて、それも人間としてやらない方がいいというようなこと。本人から見ると、そうしないと自分が安定しない。テンブル・グラインディンのアサツクみたいな形で、手を自分でしばる、しばってもらいたがるというような状態。そういう事例というのにお会いになったことはありますか。

本田…手しぱりはないですが、独特の感覚に伴うこだわりが経験しています。ただ、小さい時から私が見ている人で、社会的にもすごく異常に見えるようなこだわりが残っている人というのは、知的な遅れが重度か最重度の人の一部だけですね。やはり中度、軽度ぐらいの遅れの方になってくると、こたわりは絶対残るんですけれども、社会的に受け入れ難いようなこだわりは少なくなる人の方が多い経験しています。それは特に訓練をして減らしているという事で

はありません。自閉症の人たちに限らないと思うのですが、こだわりの強迫などは、気持ちの中に慢性的にストレスがかかっている、そのストレスが強くなると、それがとらわれに出るのだらうと僕は思うのです。逆に言うと、生活全般にリラックスできる状態を保障する事によって、こだわりがあっても、それが異常な方向にエネルギーが向くのではなくて、もうちょっと生産的な方向に向く、そういう印象を持ちます。

石井…こういう人について私が考えていることは心理的な機能として、自己を守っていく感覚の方にかなり走っているというか、そうしないでは治まらないという癖になっっている。

本田…そうですね。やはり重度、最重度の方というのはピアジェの発達理論で言うところの感覚運動期にとどまっているぐらいのレベルの人だと思うのです。そうすると記号的な世界にまだ行かないのですから。

石井…行かないですね。

本田…どうしても周りの感覚だとか、体を動かしたときの感覚入力によって、自分の活動範囲を定め

て安心するみたいなどころがあると思うのです。だからそこの中で、何らかの形でパターンができてしまつと、ちよつと歪んだ形の感覚入力にこだわるといふような事はあり得るのかもしれないですね。

石井…そうするとやはり自分をコントロールする自我が、言ってみれば他から入力する働きがないから、自分で好ましい感覚の柔らかいものや、形がわかりやすい硬いものへむいていくのですが、とりつきやすい感覚を求めるといふことで混乱を抑えるのですかね。僕は何か、硬いものというのが意外と、いわゆる鉄道や何か、ああいう事に動いていくというのは、結局は自分がもう本当にふわふわした自分のとらえどころのないものを縮めるといふような、何か作用があるのかなと思つています。こだわりもいろいろなかだわりがありますから、一概に言えないですね。

本田…本当にこだわりはいろいろですよ。自閉症の方は基本的には何にでもこだわれると思つています。対人関係にだつてこだわることがありますから、そういう意味では人の気持ちを操作する事以外

は、だいたい何でもこだわらるんだらうと思つているのです。やはり自分にとつて確実にこうやればこうなるということを確認して安心したいのだと思うのです。

石井…そうですね。そういう、あの種のやはり強迫みたいな。

本田…それに近いと思つています。

石井…やはり、自分が求めているものに出会う符号性というものをすごくいいと感じているのですよね、恐らく。

本田…だと思つていますね。これは別に原稿にしていただけでもかまわないですけれども、僕自身が自閉症スペクトラムなんです。

石井…私も含めて、私の周りでもみんな、いろいろありますよ。

本田…僕の場合はかなりマニアックなこだわりがあるのです。例えば音楽が好きなのですが、音楽が好きなの場合、何百曲もものすごくマニアックに博識になるタイプがいますよね。僕はあまり博識にはならないのです。どちらかというところ、だんだん聞き込めば聞き

込んでいくほど、好きなものが狭くなるのです。例えばあるジャンルの音楽だったら、この人でなければだめだし、この人の、この時期の、このアルバムでなければだめとか。その中の、さらにこの曲の何分何秒から何分何秒の、この間がとてつもなくいいみたいな、そういうふうになんか狭くなつていくのです。だからある決まった曲を何百回も同じところだけ繰り返し、3カ月ぐらい聞き続けるみたいな事をやるのです。例えば小さな自閉症のお子さんがビデオの同じ画面を何度も、何度も繰り返し見ますよね。僕、あれは



すごくわかります。

石井…そういうのがいくつつかあるのですか。

本田…いくつかあります。ある時期、もうそれしか聞かない。例えば3週間ぐらいは同じ曲を延々と繰り返し聞くみたいな事をやるのです。

石井…気分が変わりますか。

本田…そうすると飽きるんです。飽きると、途端に何か急速に興味を失って、次の曲に行くんですね。その次の、また別のものに対象が移っていきます。

石井…それはストレスがなくなるとか、何かそういう効果があるのですか。

本田…あまり関係ないかもしれませんがね。だから常に何かそういうものがないと。

石井…むしろ生活の中の符号性みたいなもの。

本田…そうですね。だから自分の生活で、例えば毎日風呂に入らないと、何となくもやもやするみたいなのと同じように、それが生活の一部に、どこかにそういうものがないと何かしつくりこない、そんな感じですね。

△日本のオリジナルな学説▽

石井…でも、先生の本は、別に誰かさんの学説というよりも、ご自分でお考えになったことが多くいですよね。

本田…そうですね。

石井…本当に、お世辞ではなくすごいと感じています。今ももうかなり広がっているでしょう。だから僕はすごく嬉しいのです。そういうオリジナルなものというのは、日本ではあまり出てこない。誰々さんが言ったとか、アメリカでやっているとかそういう考え方や方法が多すぎます。

本田…そうですね。

△統合失調症と自閉症▽

石井…カナー氏は、どちらかというと、自閉症は、統合失調のような考え方になっていたということを開いたのです。それはあまり気になさらなかった。

本田…私の理解だと、子どもの統合失調症と見るべきなのか、別の病態と見るべきなのかを、最初カナー氏は保留したのだと理解しています。彼はそこであまり多くを語らなかつたのですが、70年ごろになってから、どうも統合失調症

とはやはり違うというふうに、どこかで書かれたのではないかと理解しています。

石井…そうすると、これは誤解ですね。日本の場合には1950年に鷺見さんが学会で事例を発表されましたね。あの時の日本の学会はどうだったのでしょうか。いわゆる小児精神病と自閉症の区別というのはあまりなかったのですかね。

本田…あまりなかったと思います。『Journal of Autism and Developmental Disorders』という雑誌があります。創刊時はカナー氏が編集長でしたが、当初は『Journal for Autism and Childhood Schizophrenia』という雑誌名だったのです。自閉症と子どもの統合失調症との関係は、当時は保留になっていたのだと思います。50年代の日本でも、あまり議論されていない状態だったと思います。

石井…日本の場合には、それを取り入れて主張されたのが牧田清志氏なのですかね。

本田…そうですね。やはりお弟子さんです。

石井…そうですね。それに対して平井信義氏あたりが、小児精神

病という考えにある意味では批判されたという感じでしたよね。

本田…そうですね。

△自閉症スペクトラムへの道▽

石井…イギリスの精神分析医であるタスティンの本を読んで、これは医学というより心理学の方で、発達早期に外圧に対応策がない状況の子どもが鑑を被る傾向か、拡散受容して、いわゆる錯乱するか(統合失調)というところに違いがあるという発達上の指摘があるのですが、先生は臨床的にはどんなふうにご考えられたのですか。

本田…ヨーロッパは多分、2つ流れがあると思うのです。1つは、分析の流れというのは確かにあると思うのですが、どちらかというと、私の理解ではイギリスの一部と主としてフランス辺りに流れている流れというのはそちらに近い流れだと思っています。イギリスとオランダの学者は60年代にカナー氏の自閉症と今で言うアスペルガー症候群の比較研究をしていました。あの当時、アメリカではまったくアスペルガー症候群は無視されていたのですが、ヨーロッパでは多少知られていたのです。理解として

はカナー氏の言う自閉症というのは小児精神病のジャンルで考えられていて、一方アスペルガー症候群は精神病質、今で言うところのパーソナリティ障害のくくりで考えられていたのです。どうもアスペルガー氏自身も、そういう理解をしていたのではないかと、これはウイング氏が79年にアスペル

ガー氏と会った事があり、その時にアスペルガー氏はやはりカナー氏の言う自閉症と自分の言う自閉症精神病質とは別のものだと考えていたらしいです。カナー氏が

言っているものほど、自分のケースたちは重くないという言い方をされていたと聞いています。「鎧を被る」という言い方は、私はあまり自分では使わない表現なのですが、カナー氏の言う自閉症の方がどちらかというところ、そういうイメージで理解されたかもしれませ

んね。

石井…なかなかいろいろな概念が出てきて整理がつかないところがあり、今日はそれを伺おうと思っ

ていたのです。

本田…裏話をすると、79年にウイング氏とアスペルガー氏が会って

いて、たしか翌年の80年にアスペ

ルガー氏は亡くなっているのです。

石井…1980年でしたか。

本田…つまりウイング氏がアスペルガー氏に会ったのは最晩年で、アスペルガー氏はその直後に亡くな

って、実はウイング氏が「アスペルガー症候群」という論文を書いたのが81年なんです。そこでカ

ナー氏の言っている自閉症と、アスペルガー氏が言っているアスペル

ガー症候群はどうも連続しているかもしれないという事を言った

のです。だから後の自閉症スペクトラムに通じる考え方を81年に書

いているのですが、あれはアスペルガー氏が亡くなった後に書いて

いるのです。

石井…ウイング氏はむしろアスペル

ガー症候群という名前がついたことについて、何か反省している

という話を僕は聞いたけれども。

本田…いや、それほどしていないと思いますよ。

石井…そうですね。

というのは当初ウイング氏が考えていたのは別に「自閉症の仲間ではない」と言っているわけではありません。たとえ話ですが、ピンク色という色は赤の仲間ですよ。石井…そうですね。

本田…つまり赤スペクトラムと言ってもいいわけですよ。けれども、中間色で、赤の仲間というよりはそこに独自の名前をつけた方がイメージが膨らみますよね。

石井…なるほど。

本田…だからアスペルガー症候群というのは、もともと自閉症と言うと真っ赤な人たちの事を自閉症だとみんな思っていたのですが、赤とは別物に見えるけれども、このピンク色というの実はよく見ると赤の仲間だよというような事を言うのに、これはウイング氏自身が書いている事なんですけれども、自閉という名前、Autisticとか、Autismという名前をつけてしまうと、大人の精神科医は見えない、見向きもしない。つまり「ああ、これは子どもの問題なんだね」という事で、みんな見向

きもしないんだけれども、実はアスペルガー症候群の人たちが本当に問題になるのは成人になってからだ。だから成人の精神科医にこそ、その事を知らしめるために、あえてちよつと違う名前をつけたというような事をどこかで書いていたんですね。



石井…なるほど。そういう意味か。
 本田…それで大人の精神科医たちが興味を持つに至ったという意味では非常に意義があったのではないかと思います。

△構造化とは、本人の独立と自由を保障するためのもの▽

石井…本田先生の言われている構造化の理論というのは一般に通用しているんですか。構造化というのは何か、その部屋なら部屋自体とか、人なら人をわかりやすくする為の手法であり、こちらを主体に考えているのですか。

本田…シヨプラー氏は考えていたと思うのです。シヨプラー氏がまだ構造化の理論を論文化する前に書かれたものの中で、彼は子どもの支援で大事にしているものの1つにCompetence Motivationを挙げたのです。

石井…Competence（自分から力を伸ばす）ですね。

本田…ところが、構造化の話が出てきた時にCompetence Motivationということあまり表に出さなくなっただけですね、彼の著作の中で。それでシヨプラー氏に会った時に、Competence Motivation

というのは一体どうなったのかちょっと聞いてみた事があるのです。すると彼は、構造化というのは子どもたちに独立と自由を保障するためのものだと言ったのです。構造化をするというのはむしろ構造化する事ではなくて、ああいう構造化された環境をつくる事によって、彼らが自由意思に基づいて独立して動く事ができる。そのためのものだという事をおっしゃったのです。構造化を間違えて使っている人たちは、視覚的な提示をするとか自閉症の人たちは言う事を聞くのではないかと思うのです。それは大間違いです。要するにわかりやすくできる事はわかりやすくして見せた上で、本人の自由意思に基づいて行動することを保証しなさいいけなわけです。見せたら本人たちが自由意思に基づいて行動して、それがこちらの提案と合致すればうまくいくし、提案と合致しなければうまくいかないわけだから結局あれは突き詰めて言うと、合意をするという事になるわけですね。

大変良いことだと思います。
 本田…だから僕は別に外れた事を言っているつもりは全然なくて、構造化というのは本当はこういう意味があるのではないかと言っているのです。
 石井…それは一般的に認められていないんじゃないですか。
 本田…認められていないというよりは、みんなが自分で考えないからいけないのだと思っています。
 石井…ああ、そうか。
 本田…あつちの人たちがわかりやすくすると言うから、みんなが受け売りしてわかりやすくすると言っているだけであって、もうちょっと自分で考えれば、そんなに外れて事を言っているつもりはないんですけれども。
 石井…いや、私もむしろ先生が言われている方がわかりやすい。そういうしないと、子どもの発達に応じて1つの構造で対応していると、いろいろな状況の設定・舞台装置をその都度変える事はできないだろう。
 本田…そうですね。
 石井…時間が迫ってまいりました。今日は本当にありがとうございました。

今回、一昨年に開催された全国自閉症者施設協議会千葉大会(分科会)で発表していただいた「あの家」の余暇支援について、原稿をお願い致しました。分科会に参加されたことで、ご本人なりに変わらなければならぬことや、もっと施設で取り組んだ方がよいこと等も同時に発見出来たようでした。

余暇支援に悩まれている施設も多いかと思いますが、本記事から何か気づきを得るきっかけになれば幸いです。

今号だけでは掲載しきれない為、2回に分けて、続きは次号、掲載させていただきます。
 (編集人)

自閉症の人達との楽しい余暇活動(その1)
 社会福祉法人 梅の里「あいの家」
 主任 春日 和之

「一人に一つの楽しみを一緒に探す」、その事が余暇支援に取り組み私のコンセプトであり、福祉の世界に入った頃よりその姿勢に

変わりはありません。

先ず私は、北海道にあります酪農学園大学を卒業後、無菌の実験動物（SPF）を飼育管理する会社に約10年勤めましたが、殺生に疲れ、人を慈しむ仕事に付きたいと願い福祉の世界に飛び込みました。従いまして、福祉の専門教養には大変に乏しい人間です。その点をご配慮いただき、以下をお読み頂きたいと思います。

まず、「あいの家」に異動してから20年余りの余暇支援活動ですが、取り組む中で大きなターニングポイントがありました。14年ほど前の事、全自者協大会に初めて参加させていただいて「利用者を受容して、分かり合っていく」ことの大切さを学んだのです。大変に大きな衝撃でした。「これは僕がしたい事だ！」と直感的に思いました。

この学びをもとに試行錯誤しながら取り組んだ結果、「野球遊び」や「パズル」などでもその取り組み方に、工夫や幅が生まれ、特定の利用者だけでなく多くの利用者にフィットしていきました。それは「野球遊び」「パズル」だけに限りません。「貼り絵」や「お話し」、

遊戯や音楽などなど、何かしらが不思議なほど個々にフィットしていきます。

以上の過程を振り返りますと、中心となる考え方からもたらされる働きかけにより、様々なメニューが個々の利用者にとって分かりやすく、動きやすい取り組みとなります。時間、場所は掛かりませんが次第に楽しみが誘われていくものと考えます（それは、基本的な障害特性の理解にも結びつきます）。楽しくて、支援員ともそれを分かち合える共感や「僕にも出来た！」と意欲が芽生え、スキル面での向上に繋がるだけでなく、気持ちの面での安定などにもその効果は広がります。こちら側の価値や流儀でどんなに一生懸命余暇メニューを提供しやりとりしたとしても、ニーズが合い楽しめる利用者は僅かですし、個々の見え方や聞こえ方、捉え方や身体への動きなどを理解していなければ、単に提供しているだけとなり、自らも迷惑にもなってしまう。楽しみを探す働きかけは直接、利用者の理解に繋がると考えます。

楽しみとして多くの利用者に根付いた「野球遊び」と「パズル」のやりとりを、「何時かは」と思っていました。全国自閉症者施設協議会（千葉大会分科会）で発表させて頂きました。そこでありがたい事に、数多くの施設支援員の皆さんから沢山の賞賛を頂戴しました。その後、「あいの家」の「父母の会」でもお話しさせて頂く機会に恵まれて、「野球遊び」と「パズル」を含む、これまでの多くの余暇支援活動を振り返り取りまとめることができました。総ては全自者協での発表からであり、本当に感謝しております。

発表による具体的な効果と感想としましては、
 (1) 長年取り組んできた余暇支援活動を振り返り、利用者にとり提供するまでの狙い、考察、工夫改良、提供の仕方など、繰り返しできた経緯を体系付ける事ができた。

(2) フィットしてきた理由、因子を客観的に振り返る中で、自閉症の人達への理解が深まった。
 (3) 司会を務められた全自者協広報委員の方から「誰でも気持ちよく走れるCDを開発したら」との提言を頂く。特に個別プロの野球の取り組みで、利用者が快になるニーズに応じたCD（市販）の提供から、曲に応じて走ったり歩いたりする自らの動きが、10数人の利用者に出てきているなど結果に結びついている。

(4) 昨年度も今回も含め、全自者協の大会に参加して自閉症者施設の皆さんと出会えた事。良い出会いとご縁は私自身の勉強や広がりだけではなく、梅の里「あいの家」にとっても支援員の啓発に繋がるなど有益となっている。

また、発表した分科会の印象としましては、全自者協での発表は、貴重な経験であり誇りともなりませんが、自閉症専門施設のそうそうたる方々を前にする緊張は大変なものです。私も、それに該当するもので、発表席に着いた直後から震えが止まらなくなりました。その様な状態の中でも、皆さんの眼差しが温かく、大きな安心と励みになりました。

たぶんその温かさは、対応に難しい自閉症の利用者と向き合い、安定をもたらして来た人達を持つ共感とか仲間意識かと思いま

す。この言葉にならない雰囲気は、全自社協の大会ならでばだと思えます。今後もこの雰囲気を大事にして、施設の現場での実践のための研究大会であって欲しいと思いました。

前述の他にもこれまでに取り組んできたメニューは、動的・静的ともに多種多様です。様々な遊具・遊戯具（教材・教具）、ゲームや運動、キャンプなどなど、個人とグループのニーズを考えて提供していますから、随分風変わりなやりとりもありますが、取り組みの一部を2回に分けてご紹介させて頂きます。今回は千葉大会の後、新たに取り入れたやりとりです。

特にキャッチボールでは、下半身を動かさずに捕球する人がほとんどです。なかなか出にくい左右の一步を狙いアプローチしました。

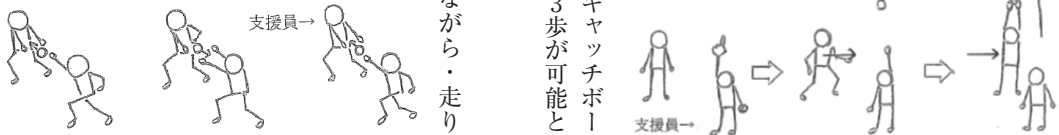
(1) 野球遊び（アメリカン・キャッチボール）：アメリカン・ノックをもじつての命名。

前述のように自閉症の人達は、構えた足を動かしての捕球が不得手で、左右に外れたボールに対して横の1歩を出せる人は少ない。

支援員と7、8 m離れて正対し、左右1、2 mを指差し、声掛けを入れてフライを投げる。落下するまでに時間があるので1歩2歩と移動して捕球出来る人がいる。定着すると7、10 m離れてのフライではない通常のキャッチボールでも、左右の1、3歩が可能となる人がいる。

(2) 野球遊び（歩きながら・走りながらのキャッチボール）
下半身（脚）を柔軟に動かす狙いで実施する。支援員との距離は3、4 m。同一方向にユックリと歩きながら、支援員からボールを投じる。慣れない利用者の一部は立ち止まっ

て捕球する。支援員は先に進みながら手をかざし投球を求める。以上の繰り返しの中で、次第に歩きながらの捕球投球が可能となる。確実にとなつたら、小走りでのやりとりレベルをUPする。



(3) 「楽しく走る」ための試み
自閉症の人達には、協調運動が不得手な人が多く、最も基本的な全身運動である歩行でも、両腕を交互に大きく振りリズムよく歩ける人は少ない。走るとなるとなおの事で、好みとしていない人が多く、中には苦手意識すら持っている人がいる。運動とは、なに人であっても、「楽しめる取り組み」が「爽快感や発散」に繋がるものであり、特に自閉症の人達であれば、まずは苦手意識の払拭が必要になると考える。それには、「やらされている」から「やりたいくなる」への気持ちの面での転換が大切で、楽しくなる雰囲気と障害特性を考慮した「場面」と「終わりの見える」状況設定がポイントとなる。その為に、多くの人に軽快な気分を誘える定番の音楽を用いる事にした。選んだ曲は、緩急のメロディーがほぼ30秒、1分

で交互する「プラン甲子園」。音楽により「歩く場面（緩）」「走る場面（急）」と、終わりを見えやすくする事で、安心して取り組みが可能となり、中には即日定着する人もいた（音楽による構造化）。それには爽快感や発散も伴うことから、グループ意識からつられて走る人も出てくる。それは、「楽しい？ 雰囲気」から「楽しめる！ 雰囲気」に広がるプラスの相乗効果であり、「頑張れ！」「走って！」などの支援員の叱咤激励もなくなる事から、取り組む雰囲気は更に良くなる。およそ半年間で、個別プログラム野球のメンバーを中心に10数人の利用者に定着しているが、多くは笑顔の伴う取り組みとなっている。

（以下は、次号に続く。）



1. 世界自閉症啓発デー 2014・シンポジウム

日 時：2014年3月29日（土）10:00～16:30

・会 場：	全社協・灘尾ホール（新霞が関ビル内）：東京都千代田区霞が関 3-3-2	
・テ ー マ：	『共に支え合うーみんなで作ろう、やさしい街をー』	
・内 容：	(1)	式典
	(2)	シンポジウム 1 「暮らしやすい街づくり」
		シンポジウム 2 「私たちの街では」
	(4)	当事者のメッセージ
・定 員：	500名	

※参加の申し込みの受付

事務局：社団法人日本自閉症協会 TEL:03-3545-3380 FAX:03-3545-3381

<http://www.worldautismawarenessday.jp/>

2. 東京タワーブルーライトアップ企画（場所：東京タワー）

(1)	東京タワーブルーライトアップ
	日 時：2014年4月2日（水） 18:30～22:00
(2)	パネル作品展
	日 時：2014年4月2日（火） 15:00～点灯式終了まで（予定）

○ブルーは癒しや希望などを表す色です。

○世界各地や日本各地でブルーライトアップが行われます

自閉症スペクトラムのための総合保障のご案内

平成 26 年 4 月 1 日から、これまでの ASJ 共済は一般社団法人(予定)日本自閉症協会 ASJ 保険(傷害疾病定額保険)となります。保障制度の名称は「自閉症スペクトラムのための総合保障」で、従来と変更ありません。併せて重要なお知らせとして、平成 26 年 4 月 1 日からの掛金および保険内容につきまして、以下のように一部変更になりますことをお知らせ致します。

平成 26 年度 ASJ 保険と AIU 保険の変更のポイント

項目	平成 25 年度	⇒	平成 26 年度(平成 26 年 4 月 1 日～)
事業運営	社団法人 日本自閉症協会 共済事業 ASJ保険(共済)事務局	⇒	一般社団法人 日本自閉症協会 保険事業 ASJ 保険(傷害疾病定額保険) ASJ保険事務局
会員名	共済事業加入者	⇒	ASJ 保険加入者
掛金	加入タイプ A(注1) ●日本自閉症協会の個人正会員の方 15,100 円	⇒	15,900 円
	加入タイプ B(注2) ●自助会員(保険のみ加入の会員) 15,600 円	⇒	16,400 円
	● 一家族で自閉症のお子様2人目から (ASJ保険(共済)部分のみが半額になります) 11,950 円	⇒	12,350 円
AIU 保険 死亡保険金	死亡した時 : 300 万円 後遺障害保険金 300 万円～9.16 万円	⇒	死亡した時 : 229 万円 後遺障害保険金 229 万円～9.16 万円

(注1)加入タイプA ●日本自閉症協会の個人会員とは下記の方です。(所属が〇〇県自閉症協会)

- ①日本自閉症協会の正会員(加盟団体)の構成個人正会員及び個人賛助会員の方
- ②日本自閉症協会の個人賛助会員の方

(注2)加入タイプB ●自助会員(保険のみ加入の会員)(所属が事務局)

- ③日本自閉症協会の自助会員(平成 25 年度より新設)
- ①②以外の方がASJ保険に加入頂く場合は、加入手続きで同時に自助会員となって頂けます。

◆お問い合わせ・お申込み◆ 社団法人 日本自閉症協会 ASJ保険事務局
〒104-0044 東京都中央区明石町 6-22 築地 622
TEL:03-5565-2020 FAX:03-5565-2021 E-Mail: asj-hoken@autism.or.jp
【(営業日)月～金(土・日・祝・祭日除く)10:00～16:00】

編集後記

今号より、編集人をさせていただくことになりました。慣れない作業ではありますが、諸先輩方のご指導を仰ぎ、独自の情報発信の姿勢を引き継ぎながら務めて参りたい所存です。発行に際して、お忙しい中、ご協力下さいました皆様方に、心より感謝いたします。

(宇治原)